観世流謡曲　元和卯月本

24-001

24　さねもり

国立国会図書館

ワキサシ「夫西方ハ十万億土、遠く生るゝ
道なから、こゝも已に弥陀の国、
貴賤群集乃称名の聲、日
夜乃法の場、地 ワキ「実もまことに
摂取不捨乃ちかひよたまこの
ワキ「頼むへき、上ゲ「獨るも佛乃御名を
尋ゝ事〳〵ともし〳〵鐘の法の

書 19.9.25 国会図

よそ知も志るぬも心なくちりぬの
あこよもるへきや知人も志るぬ
人をもまらはしらぬや加乃國へ行
法乃身うかゝるも安き道とかやく
笙歌ちるかゝるきこゝ孤雲乃上
の風来迎す落日乃前甚だ
いやきふもゝ紫雲の立てゝ

鐘乃をと会佛の声乃ゆゝ作
びてハ聴ゆも海なるゝ所な
きらはよ立居ちるしき老乃浪の
奇もつりすハ法乃揚りし余所
なりしもや聴ゆを三ゝ称名の
聲乃うちにハ桜取れ光明曇ら
祢ともに老眼乃道路なるをも浪れ

観世流謡曲　元和卯月本　24-004　24　さねもり　国立国会図書館

観世流謡曲　元和卯月本　24-005　24　さねもり　国立国会図書館

名家とし　ハキ　本よりの翁乃姿余
人乃見るのハなきれたる前望
ならハ人をハのく色しぞよりて
て名家作へ　ミテ　昔長井安芸家
家國也此原屋乃合戦に討きぬ
ぶるをよりわてしよりけらめ　ハキ　されハ
平家乃侍らえて乃名将ぞ乃

いくれ物語ハ出来ぬ作れたと乃名を
名家とし　ミテ　やはきハよう具家國ハ
此ゆなる池水にて鬢ひきを
もあらけれと思されハ執心
殺ひきれ今も此なるの人にハ
まにはろし乃ことくこゆるとしけ
ハキ　松今もんにしてしけり　ミテ　深山木の

其梢とハ何とて申ぞ桜ハ花に
あらハれたる若木をそれと御覧
ぜよ　ふしぎや扨ハ実盛の名を
聞つる物からのこさと思ひ
てりぞの上に聞るかきの柳ハ
たとハ実盛の其幽霊にてまし
ますか　我実盛が幽霊なるが

魂ハ冥途にありながら魄ハこの
世にとゞまりて　猶執心の閻
浮の世に　二百余歳の程とハ
ふれ共　うかびもやらで篠原の
池の徒浪よるとなく　昼とも
わかで心の闇の　夢ともなく
うつゝともなき　おもひをのミ

観世流謡曲　元和卯月本　24-007　24　さねもり　国立国会図書館

原原乃草墓の雲の翁されし
人なとりめう假和におしられいそ
たる宮風り名をもし給ふなよ
なら世語もちつしそうなを立
きて行かとこれも志乃りの池の
邊にて姿ハまをろしと申てうせ
にけれ　いはや前時乃称名

にて彼幽霊をとふらひと原原
乃池の邊乃法の名しかくさ
頼正称名乃聖すミ乃るとふらひの
和尚よりは和尚に並ぶ也
面へ行同乃光とたしよくもあるを
かゝはをあしてあるすかりに南無
ひの深池佛南無阿深池仏　極楽

世界は世手ぬれば永く苦衆を離
るそ猶迫乃故鄙陽をぬ歓喜
の心いくらや前ハ不退乃所
命ハ無量壽佛とあるのだのもしや
今ハ心うくまるんハ祈山く
ことよ注生す　なまとゝ所を
即是歸命　阿彌陀と所ハ

具行此義をもつて乃故に　かなら
ら注生をうゝ也　あり
かるや　小しきやあまたゝ見あらる
池乃面に絵にうかれよるも乃を
見まハ有つる翁あるか甲曹を帯
まるかしきにしく　埋木乃人しまを
ぬ木と沉めとも心乃池の云ふ

観世流謡曲　元和卯月本　24-010　24　さねもり　国立国会図書館

おにまをいぶとりハいろ乱るべきな
とりハ至ら乱るべき　其一会評論伝
即減学量罪即自向参殿心ゝ
ろを好すぐるのなりれ　時至てこ
よひ値ゆゝき御法をうゐ乱べき
乱学を乃物語様も昔をまゐまを
ゆゝねて志めかゝよ似たる原原の学

の陰哲も乃露ときしゝ様語を
ゆゝへし　板も原屋乃合戦破を
しゝハ源氏乃ゝいゝ手塚の太郎
え國木曽殿の御前にまりて卜
やうゞえ國ゝよう亭異乃曲者と
組てくれそゝ夫将と文書ハ
つゝそ勢もおゝしゞ又仰りとおもへそ

錦乃直垂をとらるゝなのまくと
責まし終よ名ならば聲ハ坂
東老よりて作れと申曾は天晴
長井乃次郎が當宮國よりて也有
ら無しだらハ鬢なしを乃白髮なるへ
きが黒ゝ不審なれ樋口の次ハ
見知たる覺とてめされしかそ

樋口まいり唯一目みくに涙をいら
たらとなりて（下）あなる悲やな次郎
為国よりて上きるうや（中）宮國常よ
申しハ六十に明て軍をとそ
殿原とあらうなりて行きをも
れとなをなしに又若武者にて人に
（中之汎）
ありあるらわ無しも口惜るべし

観世流謡曲　元和卯月本　24-013　24　さねもり　国立国会図書館

くしならぬ望となりさねもり
都を出し時宗盛公に申やう故
郷へは錦をきて帰ると云
本文あり実盛生国は越前の者
にて候ひしが近年御領に付
られて武蔵の長井に居住仕
候き此度北国に罷下なば定
めて討死仕るべし老後の思
出これに過じ御許と望しか
ば赤地の錦の直垂を下し
給りぬ　然れば古歌にももみち
葉を分つゝ行ば錦きて家に
帰ると人や見るらんとよめるも
此本文のこゝろなりさねもりは古への

朱賞臣ハなしき乃祝をしき桃山
りけるかへしの今の宮國ハ名をれ
風乃ちまるにかをかくれなるし
ら丸乃名ハ末代にも明乃月の
和をかくり山をわくり中山を
宮や懺悔乃物語心の水のうこき
よく濁るをおし給ふなよ　うの

桃山乃御殿の道ぞくりして又宮に
ず曾とくまゐとたくみしを平塚め
り隔殿まし世人会を今にあり
つゝ兵詐しとゞ名のる中にもまつ
まを　平塚の太郎宮國　郎出
ましをうしきしと　かを隔てて
宮國と　をしなくしく山處を

あたりれをのまハ日本一乃剛の者と
軍論をよこそ戦の苦悩に押付そ
られかきつてをそくまわ　八の
侍平塚の大島ぞ感りら平にまま
りて菜をうちたゝ見上そ二刀
乃す食をむすと組て二辺りあ
ひにうと落ちるり　若義者乃

渡し乃ハ軍にハ志たりわるかぶ勢に
ちゝめる枯木乃力もおれて平塚ゟ下
にある食をぞ良木ハ落あれて終り
首をハかきおとされて藤原乃ちと
なりて影もかゝるもなき弦の影も
形なし南無阿弥陀仏弟ちて寄れ
給へ弦こゝろたてたれ給へ

右百番之本者ノ紫小直
傳石岡か左兼ノ章句付
依波板紀粗以今清書
加奥ヲ畢

元和六年　観世左近大夫
卯月日　普宗

観世流謡曲　元和卯月本　24-017　24　さねもり　国立国会図書館

観世流謡曲　元和卯月本　24-018　24　さねもり　国立国会図書館